第 19 回　2008 年 6 月・ハイデルベルグ（後編）

3.キリスト教文化遺産―教会・大聖堂

　現在のドイツでは人口の 68%がキリスト教徒で、その約半数ずつカトリックとプロテスタントに分かれている。そのほか、イスラム教徒は 4%、ユダヤ教 0.25%、無神論 29.6%である（インターネット JWord 検索による）。嘗て神聖ローマ帝国であったドイツには聖堂、教会、修道院、僧院、司教館等といったキリスト教文化遺産が多数ある。ハイデルベルグの近くには世界遺産になっているシュパイヤー大聖堂がある。ホテルからバスと市電で中央駅へ行き、そこから電車でシュパイヤーまで、全行程で 2 時間足らずで行くことができた。シュパイヤー大聖堂は 1030 年神聖ローマ帝国の皇帝によって建てられた石造りの空に聳え立つようなロマネスク様式の大聖堂で、聖堂内には巨大な十字架があり、ステンドグラスが赤や黄色などが余り取り入れられていない単一的色彩であった記憶がある。地下聖堂には皇族や初期キリスト教伝道者が埋葬されていた。シュパイヤーからハイデルベルグ行きのバスで行くと、途中にシュベッチンゲン城がある。ここはファルツ候の夏の離宮で、庭園がかつてウイーンで見たシェーンブルン宮殿の庭園によく似ていた。

　マインツはハイデルベルグ中央駅から電車で 1 時間の距離にあり、駅から徒歩約 10 分のところに 910 年に起工されたドイツ三大聖堂のひとつ、マインツ大司教聖座の大聖堂がある。嘗てマインツ大司教は、神聖ローマ皇帝（ドイツ国王）を選出する権利を有する 7 選帝侯のひとりでもあった。聖堂前の広場が狭すぎたためか、ロマネスク様式の大聖堂の全容を撮影できなかった。教会に着いた時には丁度日曜ミサの最中で、見るからに高齢な司祭が繰り返し述べている話の内容は全く分からなかったが、我々もその長時間のミサにあずかった。マインツには活版印刷を発明者グーテンベルグを記念したグーテンベルグ博物館やザンクト・ステファン教会があるが、時間の関係でフランスの画家シャガール（1887 年～1985 年）のステンドグラスがある教会の方を訪れた。第二次大戦で破壊され修復されたステファン教会のステンドグラスはすべて青色基調の絵で構成されていたが、それらはシャガールが旧約・新約聖書のなかからの題材をもとに 1973 年から 10 年かけて下絵を描いたということであった。シャガールはベラルーシ生まれのユダヤ人で、第二次大戦の頃はパリに住んでいたが、ナチの迫害を受け 1941 年アメリカに亡命している。ステンドグラスの絵が何を表現しているかは短時間ではわからなかった。それらは戦禍ばかりでなく、ナチスによるホロコーストの犠牲者への鎮魂の意味をこめて描かれたのかもしれない。

ハイデルベルグには聖霊教会、聖ペテロ教会、イエズス教会など古い教会があるが、とくにマルクト広場に面してゴチック様式の聖霊教会は、マインツを含むプファルツ州最大のゴチック様式の教会である。16 世紀半ばに完成したが、宗教改革の影響をまともに被り、三十年戦争時には当時所蔵していた重要な書物「パラティーナ図書」がローマ法王軍によって戦利品としてローマへ持ち去られた。現在はごく一部が返却されたが、大部分はローマに残っている。三十年戦争の後に起こったファルツ継承戦争の時にはルプレヒトⅠ世の墓碑のみを残して、ほかの 55 人のファルツ選帝侯の墓碑はフランス軍によって破壊されたという。その後教会はカトリックとプロテスタントによって交互に使われてきたが、1705 年から祭壇と身廊（聖堂の入口から祭壇にかけての中央部分）に 1936 年まで仕切りが設けられていた。入口から祭壇に向かって左側のプロテスタント側と右側のカトリック側では、ステンドグラスの模様や絵が全く異なっており、一見異様な雰囲気であった。教会右側で入口に最も近いところのステンドグラスは、真赤な背景の中に炎を表すような絵図があり、アインシュタイン相対性理論の式（E=mc2）があり、その下に 6,8,1945 と、広島に原爆が投下された日付が描かれていた。当時ドイツ人が第二次世界大戦の同じ敗戦国の人間として、かつての同盟国の惨禍に対して祈ったということに感動した。

4.ライン川下り

ドイツにはライン川、ドナウ川、エルベ川、オーデル川など日本でもよく知られている川がある。ライン川は、スイスアルプスに源流があり、バーゼルからフランスとの国境沿いを流れ、カールスルーエからドイツ国内に入り込んで、ハイデルベルグから約 20km のマンハイム（ネッカー川と合流）・マインツ（マイン川と合流）・コブレンツ（モーゼル川と合流）・ボン・ケルン・デュッセルドルフ・ジュイスブルグ（ルール川と合流）などを流れて、オランダを経て北海へ注ぐ。ライン川は途中で様々な支流と合流し、全長 1,320km の国際河川で、そのうちドイツ国内を流れるのは 698km である。スイスのバーゼルからオランダの河口まで昔から水運が盛んであり、平和が続く現在はマインツからケルンまでの間でライン川クルーズが運航されている。とくにマインツからコブレンツの間には川の両岸に古城が多く点在し、その景観の美しさから「ロマンチック・ライン」とも呼ばれ、ライン渓谷中流上部として 2002 年ユネスコ世界文化遺産に登録された。ハイデルベルグからはフランクフルトで乗り換えて、リューデスハイムへと行き、そこからのクルーズが始まった。リューデスハイムからしばらく下る川の右岸にはワインの産地らしくブドウ畑が多く、やや雲が多い青空と南ドイツの陽光に畑の緑がよく映えた。やがてそれぞれ由緒ある名前がついた城が次々と姿を現した。古城のほか、川中島の関所という川の流れのなかに建てられた砦のような建物もあった。それらはかつて主として運航船から税金を徴収するために建てられたのである。ローレライは、クルーズの途中でライン川が最も狭くなったところの右岸の切り立った岩場のことであったが、そのあたりの川の流れは急ではなく、聞くところではかつて川中にあった船の運行に危険な岩は爆破されて取り除かれた

ということである。コブレンツより手前のボッパルトというところで船を降り、電車で約 2 時間マインツで乗り換えてハイデルベルグへ帰った。

5.終章

滞在中に一度、次男がお世話になっている教授の自宅に招待されたが、教授邸はハイデルベルグ旧市街から少し離れた閑静な地区にあり、丘の斜面が有効に使われた近代的な建物であった。周りに木々が鬱蒼と茂る邸宅の中にはハイテクを駆使した機能が詰まっているという感じで、地下にはワインケラーもあり、その室温は常に 13℃位に保たれていた。食事は、食前酒から始まってデザート、そして食後酒まであったが、メイン料理を含めて殆どの料理は驚くことに教授自身の手作りであった。嘗てアメリカでもそのような経験をしたことがあるが、客をもてなす際の心を改めて終わった気がする。

1 周間余りのドイツの古都ハイデルベルグ滞在では、まずドイツが神聖ローマ帝国と宗教改革の歴史のなかで発展してきた、キリスト教文化の精神が濃厚に伝えられていることが実感された。我が国とは異なる高等教育制度によるのかもしれないが、ドイツには勤勉な学生が多いのではないかという感想をもった。さらに、滞在中は中国料理とメキシコ料理をそれぞれ 1 回ずつ摂った以外は殆どその土地の料理を食し、その経験からドイツは現在食糧自給率 90%ということだが、日本に比べると遥かに安定した農業国でもあるということを改めて認識したものである。

そろそろこの長すぎる旅行記のような文章を終らせなければならない。

かつて大学院生の頃、恩師鈴木千賀志先生に提出し、高閲していただいた後に戻ってきた学位論文原稿は自分の文章が見えなくなるくらいに赤ペンでびっしりなおされており、文章の最後に「山は高きをもってと尊しとせず。論文には雑嚢のように何でも入れればよいというものではありません」と書かれてあったことを思い出している。ドイツ留学は若き日の筆者の大きな夢のひとつであったことや、ハイデルベルグに滞在している間、ドイツという国やその人びとの生活ぶりや雰囲気などがひどく懐かしく思え、殆ど違和感を感じられなかったことなどから、これまで書き込んできたひとつひとつの文章をどれひとつとして整理するには忍びなかったのである。